

●ありまきノ産卵

客十一月二十三日牛込區高田

放生寺ノ庭ニテ並ンデ生タル二尺五六寸回ノ栗ト一尺五六寸回ノ樫ノ幹枝ニ異様ノ黒斑ヲ認メ就テ視タルニあづき大ノ黒色ノ大ありまき(學名未詳)ノ大群ノ産卵中ニテ最初ニ視タル一群ハ本紙大ノ面ニ千五六百匹ヲ容レ尙ホ如此黒斑兩樹ニテ五六ヶ所モアリテ栗ノ幹枝ニ附着セル最大ノ一群ノ如キハ數萬相集マリテ長サ六七尺ニ沿フテ幹枝ノ半面ヲ充セルヲ見タリ、産ム所ノ卵ハこま半大赤褐色ノ楕圓粒ニシテ粘着性强ク又粹ケ易シ毎蟲五六個以上ヲ産スルガ如シ、産ヲ終リシモノハ軀壁收縮シテ疲勞セルガ如ク雨風ニ落サレテ地上ニ半死半生ノモノハ此所ニ十匹其所ニ百匹蠢爾タリ、ありまき研究ニハ屈強ノ材料ヲ獲ルノ見込アリ

(孔 貞)

●ピクリン酸にて固めたる標本の色を早く

脱する法

ピクリン酸は組織に滲透する力甚だ宜しければ標本を凝結するに汎く使用せらるる薬劑なれども人の知る如く永く其固有の黄色を存する故時には其價值

を減するとあり是までピクリン酸の色を早く脱せしむる法は唯酒精を温めて其中に浸すにあるのみなりし然るに此度の新法によればアルカリ鹽基を加へて酒精に溶けベキピクリン酸鹽基に變せしめて組織より脱せしむるなり而して數多のアルカリ中 *litium* を其効第一とす其詳細は九十五%酒精中に炭酸リセウムの抱加水溶液を加へて白色の沈澱を生じたる時其中に既にピクリン酸にて凝結せし標本を投ずれば茲に化學的變化を起して沈澱は消散し溶液は透明となり且つ漸々ピクリン酸固有の色を生むを見る此時尙此液にリセウムの水溶液を數滴下し其中に再び沈澱を生じて消散せず又溶液の色も濃くならざる時に當りて止むときは標本の組織は白色となり猛永にて固めしものに異ならざるに至る爾後は度々酒精にてリセウムを洗らひ去るべし余は普通法に同じ此法に據れば今迄脱色するに數週を要せしものと僅か數日にして其効を全ふすることを得ると然れども此法未だピクロ硫酸に試験せしことなき様なり故に其果結は斷言する能はざるは多